

# スンダー・ピチャイ

## アルファベットCEO

### AI事業で再評価 世界2位の時価総額

ネット検索大手「Google」を中核とし、ビッグテックの一角として君臨する米アルファベット。2020年代前半は、広告需要の落ち込みなどで停滞する時期もあったが、AI事業の進展などを背景に再評価が進んでいる。2026年初頭には時価総額が4兆米ドルを突破。現在は、米国企業で首位のエヌビディアに次ぐ2位の座につけている（6月中旬時点）。再び存在感を高める同社をCEOとして率いるのがスンダー・ピチャイ氏（54歳）だ。



ピチャイ氏は、「Google Chrome」の開発者としても有名だ

1972年、インドで生まれたピチャイ氏は、幼少期から優れた数学的センスを発揮。インド工科大学卒業後、米スタンフォード大学大学院に進学して以降は米国でキャリアを築いた。2004年にGoogleへ入社した同氏が成功させたプロジェクトの一つが「Google Chrome」の開発だ。当時、ウェブブラウザの覇権を握っていたのはマイクロソフトのInternet Explorerだったが、開発を主導し、世界シェア1位のブラウザへと育てた。その後、主要アプリケーションの統括やスマートフォンOSの「Android」部門再建などで実績を上げた同氏は、創業者ラリー・ページ氏らから絶大な信

頼を得て、2015年にGoogleのCEOに就任。2019年からは親会社であるアルファベットのCEOも兼任する。

### 垂直統合型のビジネスモデルが Googleの強さの源泉

CEO就任後のピチャイ氏が力を注いだのが、クラウド事業だ。長年赤字であった同事業の収益化を実現。Googleクラウドは、世界のクラウドインフラ市場でアマゾン・ウェブ・サービス（AWS）やマイクロソフト アジュールに次ぐ第3位だが、年々シェアを拡大している。

一方、出遅れが指摘されていた生成AI分野では「AIファースト」を宣言し、投資を加速した。自社設計のAI半導体「TPU」をはじめ、Googleクラウド、生成AIモデル「ジェミニ」を活用して、検索やメール、動画などのサービスを実装。AIインフラからアプリケーションまで自社で開発・提供する垂直統合型のビジネスモデルはフルスタック戦略と呼ばれ、同社の競争力の源泉とされている。

2026年5月に開催された年次イベント「Google I/O 2026」では、自律的に仕事をこなす「エージェント型AI」の時代が来ると力強く話したピチャイ氏。AI分野を発展させるリーダーとしても期待を集める。



「Google I/O 2026」では、多岐にわたる新サービスが公表された

写真:ZUMA Press/アフロ、ロイター/アフロ

**Profile** すんだー・びちやい 1972年、インド・チェンナイ出身。進学のため渡米し、2004年にGoogle入社。2015年にGoogleCEO、2019年よりアルファベットCEOを兼任。2022年に母国インドのパドマ・ブーシャン勲章受章。2024年にタイム誌「AI分野で最も影響力のある100人」に選出。他者の意見に耳を傾ける「協調型リーダー」としても知られる。

**主な参考文献:** 日本経済新聞、日経ビジネス、エンサイクロペディア・ブリタニカほか